巻頭エッセイ

Opening Essay

ブータンから見る世界

御手洗瑞子　Mitarai Tamako

ブータン政府で働いていたとき，地方出張に行くことがありました。出張といっても，日本のように飛行機や新幹線でひとっ飛びで行けるものではありません。車が通れる道がない地域も多く，場所によっては歩いていく必要があります。ときには何日も，富士山より標高の高い山道を歩き続けたりします。私はすっかり息が切れてしまって，荷物を背負った馬を引く馬方に聞きました。

「あとどれぐらいで村に着くの？」

すると馬方は答えます。

「えーっと，あと3時間ぐらいだよ」

そうか，あと3時間ならなんとか乗り切れるかもしれない。がんばろう。そう気合を入れ直して歩きます。そして3時間後，

「そろそろ村に着きそう？」

ともう一度聞く私に，馬方は笑って答えました。

「まだまだだよ。うーんと，あと3時間ぐらいかな」

頭がくらくらしました。もしかしてこの馬方は，「3時間」しか時間の答え方を知らないのではないか。

なんとか出張を終えて首都ティンプーに戻り，「大変な目にあった」と言って上司にこのことを話すと，上司は笑って言いました。

「ブータンでは，地方に行くと『何時何分』という時間の感覚がない人は多いよ。だけれど，『あの山に行く間に，ちょうど牛2頭分の乳しぼりができるよ』なんて言って，ピタリと合っていたりするんだ。」

「何時何分」という時間の中に生きていなくても，きっと彼らには彼らの時間の感覚があるのでしょう。ブータンの人にとって「時間」とは，私たちが考えるようないつまでも等間隔で目盛が刻まれるモノサシのごとき抽象的概念ではなく，具体的に目の前にある「この瞬間」のことなのかもしれません。

私はこれまで多国籍の人々がいる環境で働くことが多かったのですが，この時間感覚の例のように，文化が異なると，見ている世界そのものが異なるように感じられることが多くありました。中学校で英語を勉強していたときには気づかなかったことです。当時は，誰でも同じ世界を見ていて，それを英語や日本語など違う言語で表現しているだけのように感じていました。しかし，このグローバル化の進む世界で文化的背景も異なる相手と働くには，語学力だけでなく，「相手が見ている世界は，自分が見ているそれと異なるかもしれない」という異文化理解の心も求められるのかもしれません。

こんなことがありました。ブータンでは小学校から国語以外の教科をすべて英語で教えるため，みな英語が流暢で，仕事も英語でしていたのですが，ブータン人の同僚は失敗しても謝ることがほとんどないことに気づきました。怒っている相手を見てにこにこしています。もしやと思い，ある日友人に，彼らの母国語であるゾンカ語で“Sorry”はなんと言うのか教えてもらいました。それは字義通りにとると「気にしないで」とか「怒らないで」という意味の言葉でした。ブータンにはおそらく日本語で言う「ごめんなさい」にあたる言葉がないのでしょう。“Sorry”と言って彼らがぽんと私の肩を叩くとき，それは「怒らないでね」という意味に近いのだと思います。まるで笑い話ですが，考えてみれば日本語の「ごめんなさい」と英語の“Sorry”もずいぶんと違う言葉です。本当に，ところ変われば，ですね。

みたらい　たまこ

東京生まれ。初代ブータン政府首相フェロー。東京大学経済学部卒業後，外資系経営コンサルティング会社を経て，2010年より首相フェローとしてブータン政府に勤務。現在は気仙沼にて手編みの事業の起ち上げを行う。